

「カエル横丁」フリウリの伝統的・通読的地名：ウディネ市の一例

山本真司 Shinji YAMAMOTO (東京外国語大学) shinji@tufs.ac.jp

1. 話の舞台

イタリア共和国ウディネ市 (県庁所在地), フリウリ地方 (フリウリ・ヴェネツィア・ジュリア自治州) などで, 一応^(註), フリウリ語圏である.

*ウディネ市のネイティブの住民は, 20世紀には, ヴェネト方言化していたといわれるが, その後, 県の他の市町村から同市に流入した住民などを考えると, フリウリ語の使用は現在まで続いていると言える.

2. 同市における地名の公式名称と伝統的名称

市内の様々な場所の地名に公式の名前と伝統的・通俗の名前が併存する (同様のことは, フリウリ地方の市町村では頻りに, 他の地方でも時折, 起きるものと思われる). 例えば:

Piazza Primo Maggio「メーデー広場」~ Zardin Grant (フリウリ語) 文字通りには「大きな庭園」

Via Aquileia「アキレイア通り」~ Bordolee (フリウリ語) < borc di oglea, なお, oglea < Aquileia

ここには, イタリア語とフリウリ語の違いも関係しているが, それだけではない.

(なお, 20世紀末まで, フリウリ語は公式なステータスをもたない言語であった).

3. ウディネ市のカエル祭りと Borc dai crotârs「カエル横丁」の話

ウディネ市の旧市街の南部に, イタリア語で borgo Grazzano と呼ばれる街区がある. 教会の管轄上は, ここは, 聖ゲオルギウス san Giorgio 教会の小教区 parrocchia である. おおざっぱに言うと, 「グラッツァーノ通り」via Grazzano とその周辺の地区であるが, 通称としてフリウリ語で borc dai crotârs と呼ばれている.

現在の Borgo Grazzano の写真. 奥に San Giorgio 教会の建物も見える:

<http://www.viaggioinfriuliveneziagiulia.it/wcms/content/images/4a9ecc5a00c302009fbb8f8d80912e.gif>

このフリウリ語名は, 次章以降見るように, カエルと関係あると思われるので, 仮に「カエル横丁」と訳しておく (フ borc, イ borgo を「横丁」としたのにも問題が残るが, ここでは深く取り上げない).

2014年, 何年か絶えていたこの地区のお祭り (イ sagra, festa / フ sagre, fieste) を復活させようというプロジェクトが立ち上がり, 実行された.

<https://messengeroveneto.gelocal.it/udine/cronaca/2014/05/18/news/riecco-i-crotars-di-via-grazzano-a-udine-1.9250271> (地元の新聞 Messaggero Veneto の記事)

(なお, この記事中に quelli dei rospi とあるのは, 少なくとも, 現在の共通フリウリ語とは符合しない:

以下のように、現在のフリウリ語では、*crot* は「ガマガエル」の意味ではないからである）。

そのお祭りのポスター：

http://parrocchia.tempioudine.it/wp-content/uploads/2014/05/ CPP_sagre-dai-crotars-2014.jpg

内容から言うと、これは、フリウリのいくつかの市町村で行われる「カエル祭り」 (*sagre dai crots / festa delle rane*) の一種とみなせる。幾つかの市町村から実例を挙げる (地区名-市町村名-祭りの名前、の順に) と：

Bueriis (comune di Magnano in Riviera), *sagre dai crot*
<http://www.prolocobueriis.it/>

Ruda, *sagra dai Cros* <https://www.anteprimasagre.it/sagra-dai-cros-di-ruda/>

Rivis (commune di Sedegliano), *sagra delle rane* https://italive.it/sagra-delle-rane-di-rivis-2019/#_

だが、ウディネ市の場合は、*sagre dai crots* (フ)ではなくて、*sagre dai crotârs* (フ)となっているに注意。また、祭りの主体団体名も、*Vicinie dai crotars* (フ)となっている。

4. *crotârs* の *crot-*

ウディネ市の *sagre dai crotârs* について、祭りのイタリア語名が *festa delle rane* であること、祭りではカエルの肉の料理を食べること、グラッツァーノ通りにはカエルの置物を看板としたオステリアがあること、などを見ると、人々の意識の中では、この祭りの名前、特にその中に含まれる *crotârs* の語とカエルが結び付けられていることは確かであろう。

下記に見るように、いらか問題はあがあるが、*crotârs* は *crotâr* の複数形で、これはフリウリ語の *crot* (pl. *crots*)「カエル」^(註) に接尾辞 *-âr* が付いたものと考えられる。

*じつは、カエルの概念には問題がある。正確に言うと、日本語の「カエル」のように、両生類無尾目の動物一般をさす単語はフリウリ語には存在せず、さまざまな種類のカエルごとに、異なった単語を使い分ける。save (イ *rospo*)「ガマガエル」、*rane / crot* (イ *rana*)「赤ガエル」、*crazzule* (イ *raganella*)「アマガエル」、*muc* (イ *ullulone*)「スズガエル」、などのように (山本 2018)。*crot* は、「ヨーロッパアカガエル」*rana temporaria* や、「ヨーロッパトノサマガエル」*pelophylax kl. esculentus* を指すようである。Barbina 1981 は、フリウリの *rana* のうち、最も普通のものとしてこの二種を挙げ、どちらも食用として珍重されていることを述べている。

5. *crotârs* の *-âr*

フリウリ語ではよく使われる接尾辞で、さまざまな意味を持ち得る。例えば：

・職業名やその職業を担う人：*zeiâr*「かご売り」(< *zei*「籠」), *cramâr*「行商人」(< *crame*「つづら」), *speziâr*「薬屋」(< *speziis*「薬」), *benzinâr*「ガソリンスタンドの人」(< *benzine*「ガソリン」),

purcitâr「と殺人」(< purcit「ブタ」)

・実の付く樹木・植物 : miluçâr「リンゴの木」(< miluç「リンゴ」の実), piruçâr「ナシの木」(<piruç「ナシの実」), figâr「イチジクの木」(< fic「イチジクの実」), morâr「クワの木」(< more「クワの実」), çariesâr「サクラの木」(< çariese「サクランボウ」), cacâr「カキの木」(<cachi「カキの実」)

・何かを入れるもの・入れるところ : agâr「溝」(< aghe「水」), gjalinâr「鳥小屋」(< gjaline「ニワトリ(雌鶏)」), granâr「穀物倉庫」(< gran「穀物」), blavâr「穀物倉庫」(< blave「トウモロコシ」), ledamâr「こえだめ」(< ledam「堆肥」), jespâr「スズメバチの巣」(< jespe「スズメバチ」)

これらの情報に基づいて, crotâr の語を読み解く試みをしてみよう。

6. フリウリ語辞書 Nuovo Pirona (NP)の説明

NPによると, crotâr には次のような意味がある :

・カエルを捕る人・売る人.

* なお, イタリア語 ranocchiaio も, カエルを売る人, と, カエルが多くいる場所, の2つの意味がある.

・フリウリ低地の住民 (カエルを好んで食べる)

・ウディネでは, san Giorgio 小教区の住民を crotârs と呼ぶ.

・カエルがたくさん住んでいる場所, あるいはカエルを入れておく場所.

また, crotâr の代わりに ranâr という言い方もあるという.

同じく NP の crot の項には, san Giorgio 教会の, 聖人に成敗されているドラゴンのことを crot と呼ぶ, と書かれている.

* この作品のことについては, 例えば次のような解説がある :

www.accademianuovaitalia.it/index.php/storia-e-cultura-delle-venezie/la-patria-del-friuli/6532-chiesa-di-san-giorgio-maggiore

このように, NP には, crotârs と san Giorgio 小教区との関連は言及されているが, なぜ, 小教区の住民を crotârs と呼ぶのか, その理由は書かれていない.

7. 歴史的背景と通俗的な説

Borc dai crotârs の名前の由来としばしば結びつけられて語られるのは, 「グラッツァーノ通りには, かつては, 水路・運河があつて, そこでは, カエルがたくさんいた. 」という話である.

例えば : http://www.designrepublic.it/viewdoc.asp?co_id=2005

“ **Borgo storico** di Grazzano … detto anche "**Borc dai crotars**" in relazione alla presenza di una roggia e delle rane: crot in friulano significa **rana**) ”

かつてこの場所に水路 roggia があつたのは本当で, 写真も残っている (例えば <http://www.accademianuovaitalia.it/images/GUERRA/0-GALLERY-s.giorgio-roggia-di-via-grazzano.jpg>).

だが, この話だけでは, なお疑問は残る.

・この地区の人は「カエルを取る人」「カエルを食べる人」だから crotârs なのか（「カエルを取る人」「カエルを食べる人」が同じとは限らないが）。それとも：

・borc dai crotârs の crotârs が、「カエルがたくさんいる場所」の意味であった可能性はないのか。

もちろん、語源の歴史的経緯と現在の話者の意識するところが異なっていることもあり得るであろう。なお、この地区には、聖ゲオルギウスによる大ガエル（大ガマ？）退治の話が伝わっている。（例えば、<http://www.vicinolontano.it/locazioni/via-grazzano/>）。この伝説と crotârs の名前を結び付ける話もある。

<http://www.viaggioinfriliveneziagiulia.it/wcms/index.php?id=11314,0,0,1,0,0>

この話を語源の解決に直接結びつけることは無理であろうが、周知のとおり、民話には、歴史を理解するヒントとなる事実が隠されていることもしばしばあるので、一概に無視することもできないであろう。

いずれにせよ、この地区が、かつては町のはずれの農村地区であり、カエルなどが住むに適した場所だったということは、本当のようである。

8. まとめ

現在、話者が、crotârs を、カエルに関する何事かをする人、という意味であると考えているという証言や証拠・あるいは兆候はいくつかある。しかし、それが歴史的事実としての語源を反映しているかは、また別の話であろう。

実際、NP の説明は、そのような可能性を検証しようとしているようには見えない。また、多くの話者の証言も同様である。

いずれにせよ、冗談めかしたようなニュアンスのあだ名であつたらうと考えられるものが、ふるさと・出身地を表すシンボルとなつていったという変化は、興味深いものである。

* いうまでもなく、文章中のインターネットからの引用は、それらの情報源としての正確さを議論するためのものではなく、そのような話が民間に流布していることを示す一例として掲げているに過ぎない。もちろん、中には、研究者による、それなりに正確な記述もある。

略号

イ イタリア語 フ フリウリ語

Bibliografia (主なもののみ)

Agenzia Regionale per la Lingua Friulana, redatto da, *Grande Dizionario Bilingue Italiano-Friulano*, <https://arlef.it/it/grande-dizionario-bilingue-italiano-friulano/>

Giulio Andrea Pirona, Ercole Carletti, Giovanni Battista Corgnali, *Il nuovo Pirona: vocabolario friulano*, Società Filologica Friulana. Udine. Aggiunte e correzioni

riordinate da Giovanni Frau, 1992.

Giorgio De Leidi, *I suffissi nel friulano*, Biblioteca di studi linguistici e filologici diretta da Giovan Battista Pellegrini 1, Società Filologica Friulana, Udine, 1984.

Aldo Barbina, *Questi nostril animali (problem della fauna selvativa del Friuli – Venezia Giulia)*, Ribis, UD, 1984.

Cjarte dal Friûl. Cjarte stradâl cu la tabelle dai nons. –1:150.000. – Udine: Societât Filologjiche Furlane; Tavagnacco : Casa Edtrice Tabacco, 2005.

AA.VV., *Udine millenaria, Storia – Monumenti – toponomastica – stradario – ricordi mappe*. Direttore responsabile: Romano De Zorzi, 1972-